

【御言】

総序

- ・人間は、何人といえども、不幸を退けて幸福を追い求め、それを得ようともがいています。
- ・その幸福は自己の欲望が満たされるとき、感ずるのです。
- ・人間は善の欲望を成就しようとする本心の指向性と、悪の欲望を達成させようとする邪心の指向性があります。
- ・これが人間の矛盾性であり、したがって人間は破滅状態に陥っているのです。
- ・人間のこのような破滅状態のことを、キリスト教では、墮落と呼びます。

【感想】

私たちは誰もが幸福になろうとしています。不幸になることを望む人はいないでしょう。そして、その幸福とは自らの欲望が満たされるとき感じるということです。お腹が空いているときに、食欲を満たすために食事をすることは、幸福を感じるのだと思います。また、思春期において、生理的に成熟し、性欲を感じるようになるとき、その性欲を満たすことは、幸福につながると思います。ですが、ここで紹介した欲望は肉体的な欲望です。人間にはもっと精神的な欲求というものがあり、その一つが善の目的を成就しようとする善の欲望だということです。そのような精神を私たちは「為に生きる精神」と呼びます。ですが、人間にはもう一つの悪を成就しようという欲望もあわせ持っているということです。俗に言う魔が差すとか、小悪魔的に生きるなどという表現が存在するように、人間には悪の欲望を満たす欲望もあるというのが、ここで紹介する内容です。

ですが、この善の欲望と悪の欲望は正反対のことを指向しているということです。善は為に生きることを求め、悪は自己中心的なことを求めるように生きるということです。人間の個人の中において、このような正反対の欲望をもっていることを人間の矛盾性といいます。簡単な例で表現すると自動車に加速するアクセルと車を停止させるブレーキがあるのですが、その両方を同時に踏んでいるのと同じだということです。そのようなことをしていれば、自動車は故障します。そして、時には自動車が動かなくなってしまうのです。それを、人間では破滅状態にあるということです。人間が異なる目的の為に心が引き裂かれることを葛藤と表現することもあります。そのような心の対立を抱えては、人間は幸福にはなれないということです。

そのことをキリスト教では墮落と呼ぶのです。墮落した結果、このような人間になってしまっているということです。

では、皆様はいかがでしょうか。自分は一つの目的にまっしぐらに突き進んでいるといえますか。何故に迷い、何故に悩むのでしょうか。そこには、心に異なった目的を指向する欲望が働いている現状があるということです。

【御言】

人間の無知

- ・人間の墮落を知的な面から見れば、人間が無知に陥ったことを意味します。
- ・人間は、心と体との内外両面からなっているので、
- ・無知にも、内的な無知と外的な無知があります。

【感想】

私たちは日本で様々な高等教育を受けます。そのような私たちが無知であるということに、皆様はいささか疑問を感じることはあるかもしれません。ですが、そのような私たちにおいて、未だに解明されていない、学校教育では受けられない真理という知識があるのです。私たちは宗教や科学を通じて、様々なことを学ぶことができます。ですが、その両分野において、未解決問題が今も残されているということです。内的な無知とは人間の心に関する無知であり、外的な無知とは人間の身体やこの存在世界に関する無知をいいます。私たちは時代的な恩恵を受けて、多くの知識を得る

ことができます。ですが、霊界の存在を明確にすることもできず、また、人生の目的においても哲学などでも明確な答えを得ることができていないのです。ましてや、神様に対する正確な知識を得ているとはいいがたい状況なのです。宗教を信仰されている方は、その經典に従って、神様とはこのような方だと知っていると自負される方もいるかもしれませんが、そのような方においても、神様の存在が漠然としており、どのような姿なのか、どのような構造になっておられるのかということは、いまだどの宗教も説明できていない科学的な説明が欠如しているという状況なのです。

そのように、私たちは無知なのです。その無知の自覚こそが、私たちにおいて、新しいことを学ばなければならないという動機になります。どのような高等教育を受けようとも、また、学校などでどのように優秀な成績を修めたとしても、それは膨大な真理の一部に過ぎないのです。そのような謙虚さと自らの無知を自覚する人が、これから成長する人になるということだと思います。

皆様においてもとても重要なことなのです。自らの無知の自覚ということが。何も知らないというのではありません。知らないことがまだまだ沢山あるということなのです。そのようなことを自覚されているとしたら、この場で多くの真理を学ばれることをオススメします。そして、教会の門をたたかれ、原理を学びたいと申し出てくださいれば、門は開かれると思います。一番の不幸は、知らないことを自覚できないことだといいます。それは、自覚症状のない病人と同じで、治療のタイミングを失うこともあるということです。誰もが知るべき真理なのです。統一原理とはそういうもののなのです。

【御言】

- ・内的無知から内的真理を探究してきたのが宗教です。
- ・外的無知から外的真理を探究してきたのが科学です。
- ・それらが歴史過程においては互いに衝突してきたのですが、
- ・人間がこの両面の無知を完全に克服して、本心の要求する善の目的を成就するためには、宗教と科学を、統一された一つの課題として解決することのできる、新しい真理が現れなければなりません。

【感想】

今、世の中を見てみると、確実に宗教と科学が存在します。人生の目的、人間の存在価値を探究するとき、私たちはその明確な答えを得ていません。ましてや、有神論が正しいのか無神論が正しいかの判断もできていないのです。そのような無知を内的無知と呼び、宗教はこれまでこの問題を解決するために多くの苦労を積み重ねてきました。哲学も同様ですが、そのような探求の成果としては、解決すべき問題を明確にただけで、解答を得るには至っていません。

一方、科学はどうでしょうか。科学万能主義を唱える人もいますが、その科学も未知の分野があまりにも多いのです。物質の根源がエネルギーであることをつきとめたのは近代に至ってからです。ですが、そのエネルギーの根源がどこにあり、どのようにエネルギーが生じているのかという定説を私たちはまだ得ていません。ましてや、地球の誕生や宇宙の誕生、そして、宇宙の発展についても、私たちは未知なる分野があまりにも多いということです。生命においても神秘と称して、その理由を紹介するものは見つかりません。

ですが、重要なポイントは、人間には内外両面の無知があり、それぞれを宗教と科学は克服しようと試みてきたということです。今は、そのような無知を完全に克服することのできる真理が登場する時代なのです。宗教も科学も無知を打開するために登場しています。そして、その両面の根源が人間の根源にあたるものであり、そのような根源を神様と呼び、神様の内外両面の真理を提示できる時代が到来しており、その真理の入口を示しているのが、ここで紹介する統一原理だということです。

従来の歴史を見てみれば、科学は宗教を非科学的だと排斥し、宗教は科学を神様への冒瀆だと排斥してきた経緯もあります。ですが、私たちの提唱する原理は、その両方を一つの課題として統一して解決しているのです。ですので、私たちは単なる宗教団体ではないということです。宗教

は一側面にすぎないというのです。私たちは最先端の宗教を信じると同時に、最先端の科学を生活に応用する未来人でもあるのです。その典型的な例が霊界を活用した幸福な生活の実現なのです。霊界は宗教の分野だと思われるかもしれませんが、その法則性などを私たちは熟知しており、ある意味、とても科学的に再現できるものになっているのです。それを生活に活用し、幸福な生活を実現することを可能にしているのが私たちのもう一つの側面なのです。

ですので、私たちは宗教人であると同時に科学者なのです。根源は唯一なる神様に至るというのです。そのような真理の入口として私たちは原理を紹介しているのです。

【御言】

新しい真理の使命

新しい真理の使命は

- ・有史以来のすべての主義・思想・宗教を統一し得る真理でなければなりません。そのためには心と体、夫婦の統一から始まるのです。
- ・墮落人間が創造本然の人間へと帰っていくことのできる真理でなければなりません。
- ・神様は既にこの地上に、人生と宇宙の根本問題を解決されるために、一人のお方を遣わし給うたのですが、そのお方こそ、すなわち、文鮮明先生です。

【感想】

私たちの学んでいる統一原理が新しい真理の一端になっています。真理の全てではありません。一部だということです。そのような原理や御言で語られている真理を通じて、私たちは様々な主義や主張、思想、宗教を統一する運動を展開しているのです。ですので、家庭連合とはキリスト教と同列ではないのです。キリスト教の一つの教派ではないと私は思っています。そうではなくて、キリスト教だけでなく、仏教、儒教、イスラム教、ヒンドゥー教などあらゆる宗教における共通の根源者であられる神様を明確にして、それらの宗教が互いに排斥しあうのではなく、手を取り合って平和的世界の実現に向けて進むことを提唱する、宗教の統一運動を展開している団体でもあると思っています。

また、民主主義と共産主義の対立をも解消し、共産主義の誤りを明確に提示するだけでなく、民主主義の不備を補い、人間中心の主義から神様を中心とした神主義を提唱して、思想界の和合も呼びかけていると思っています。

そのような統一運動をしているので、世界平和統一家庭連合と呼ばれているのです。単に韓半島の南北の分断の統一を願っているというような次元ではありません。

そして、原理には後に紹介するように復帰原理が明確に提示されており、墮落した私たち人間が本然の人間に戻るための方法も提示しているのです。すなわち医学でいえば、健康な人間とはどういう人間なのかということを明確にして、病気の自覚を促し、その病気の根本原因を明確化して、さらにその治療法も確立しているというのです。これは、肉体的なことを扱う医学を例えにしていますが、不幸にならざるを得ない病んだ人生を歩んでいる人間に、幸福になる治療法が今は確立されているというのです。私たちはその方法を活用し、人々を救済しているというのです。

そのような原理を解明されたのは誰なのかというと、それが家庭連合の創始者として知られている文鮮明先生なのです。とても重要なことなのですが、文鮮明先生は人生と宇宙の根本問題を解決することができておられたということなのです。人生の根本問題は宗教の問題です。宇宙の根本問題は科学の問題です。その両面において、文鮮明先生は解答を得ておられたというのです。その文鮮明先生の解かれた解答に従って、今日の摂理があり、統一運動があると私も認識しています。

ですので、既存の宗教や科学とは次元が異なるというのです。ですので、比較すること自体が誤りのもとであり、比較しても正しい認識は得られないというのです。宗教にしてはあまりにも科学的だし、科学にしては無形世界などを扱うためにあまりにも宗教的だというのです。そのような新しい

究極の真理をもって私たちは信仰しています。まちがえないでください。決してキリスト教の一つの教派という次元ではないのです。

そのような真理をもって、万人の幸福を実現するために、私たちは日々伝道をしています。皆様はそのような真理を理解したいと思われませんか。

【御言】

第1章 創造原理

・人生と宇宙に関する根本問題は、それを創造し給うた神様がどのような方であられるのかを知らない限り解くことができません。

【感想】

皆様、神様とはどのような方なのかということをご存知ですか？ 方と呼ばれるので、当然、人格的な感情も持ち合わせておられる方だと私たちは学びます。その神様がこのすべての宇宙の森羅万象を創造されたというのです。これはキリスト教の聖書でも語られている内容であり、私たちもそれを信じています。ですが、これは科学でも重要な根本問題だというのです。

科学の世界では、この宇宙の起源はビックバンだと言います。宇宙は大爆発を起こして、膨張しながら今も成長しているというのです。これが、宇宙の起源に関する科学的な一般的見識だと思っています。ですが、私たちの知っている科学はその起源の前についてのことを知っているのです。宇宙に物質が存在する前に無形世界である霊界が創造されたことや、物質の根源が神様から生まれていること、そして、この宇宙は偶然的に誕生したのではなく、明確な意思を持って神様によって創造されていることを常識として扱っているのです。

ですが、現代科学はこのような真実を未だに受け入れておらず、進化論的な宇宙発展論を未だに展開しています。これが現代科学の限界を作っていることに私たちは早くから気づいているというのです。

そのようなことを理解した上で、私たちは人生の問題や現実的な問題を、神様を理解することで解決してきているのです。そのような問題はまず根本的に神様に対する無知が解消されなければ解決することができないと私たちは見えています。

いかがでしょうか。皆様は神様に対してどれだけのことを知っているといえますでしょうか。天を見上げて福を祈るだけのお方ではないというのです。そのような神様を、この創造原理では紹介します。そして、この神様への理解が、皆様の様々な問題を解決する鍵となることを実感されるとき、原理はあなたを救うことを実感されると思います。

【御言】

神の神性

・無形にいます神様の神性は、被造世界を観察することによって、知ることができます。
・作品を見て作者の性稟を知ることができるように、被造万物を見ることによって神様の神性を知ることができます(ロマ1:20)。

【感想】

ここで紹介するのはまさに神様に対する科学的なアプローチなのです。これまでの自然科学は、自然現象を科学者と呼ばれる人が丁寧に観察し、その中から様々な法則性や行動を見つけ出すことから進展してきました。それと同じようなアプローチを神様に対しても行うというのです。ですので、宗教的な啓示による演繹的な神様の理解ではなく、被造世界の観察から帰納的に神様を知ろうというのです。

このような観点からも、統一原理は単なる宗教の教理ではなく、とても科学的な側面を備えていることを物語っているのです。

そして、この森羅万象の宇宙が神様によって創造されたとするならばという仮定のもとに様々な事実を確認してゆくのです。

私たちは自然世界を愛情を持って観察することで、そこに神様の神性が反映されていることを発見するのです。後に語られる内容ではあるのですが、自然を正しく認識するためには、自然を愛情を込めて観察し、自然と円滑な授受作用をすることが必要になります。それができなければ、人間と自然を闘争関係のように見つめて、自然界を闘争の展開された世界だと誤認してしまうこともあるのです。それが共産主義の唯物論的な視点でもあるのです。

ここで紹介する創造原理は神様を知る上で被造世界を良く知ることを奨励しています。そのような意味で、宗教でありながら、自然科学への理解を勧めるものでもあります。ですので、私たちは宗教人であると同時に科学者なのです。

【御言】

被造世界に潜んでいる共通の事実

- ・被造世界に潜んでいる共通の事実を探ってみることにします。

- ・存在しているものは、いかなるものであっても、

- ① それ自体の内においてばかりでなく、他の存在との間にも、陽性と陰性の二性性相が相対的な関係を結んでいます。

- ② もっと根本的には、外形と内性を備えており、外形は見えることのできない内性が、そのごとくに現れたものです。内性を性相といい、外形を形状と名づけます。

そして、これらを総合して二性性相と称します。

【感想】

人間を眺めてみれば、人間には男性と女性があります。動物においては雄と雌が存在します。植物の花においては雄しべと雌しべが存在します。それが原子のレベルになると陽子と電子というものになるというのは皆様もお分かりになると思います。このようにすべてのものが陽的なものと陰的なものになっているというのです。そのような事実を見る時に、すべての存在物は陽性と陰性に分けることができるというのです。そして、この陽性と陰性が相対的な関係を結んで、繁殖し、作用することを自然科学は解き明かしています。ですので、そのような陽性と陰性を二性性相と呼ぶのです。

そして、物事をもっと根本的に見つめるともう一つの二性性相が存在するというのです。それが、人間でいえば、心と体の関係のように、目に見えない内性と目に見える外形の関係なのです。これも、すべての存在において見られる二性性相なのです。動物にも本能というものがあり、植物にも、そして原子などにおいても、その法則性などに見られる内性というものが存在するのです。そして、そのような内性を性相と呼び、外形を形状と呼びます。そして、その両者が相対的な関係を結んでいるので、これを性相と形状の二性性相と呼びます。

ですので、本然の原理的な人間とは、心と体が相対的な関係を結び、円滑に授受作用をして一つになっているのであり、家庭において、男性と女性が相対的な関係を結び、円滑な授受作用をして、一つになっているというのです。これが本来の健康な人間の姿だというのです。そして、現実がそのようなになっていないというのが、墮落という病気によって病んでいる人間の姿なのです。

このように、理想的人間ということを考える時に、この二性性相の概念はとても大切になると私は思います。二性性相は調和的に一つになっている。それが理想的であるという基本になるということではないでしょうか。

【御言】

神様の二性性相

- ・森羅万象の第一原因であられる神様も、陽性と陰性の二性性相の相対的な関係として存在するの

は当然の結論です。

・神様はあらゆる存在の第一原因として、これらすべてのものの主体となる性相と形状を備えています。この主体的な性相と形状のことを本性相と本形状といいます。

【感想】

先日は森羅万象が性相と形状、陽性と陰性の二性性相で造られていることを紹介しました。では、作品と作者の関係を見ればどうなるのでしょうか。神様にもそのような二性性相があるということなのです。この論理的な展開が帰納的な展開であり、自然科学のアプローチととても似ているのです。そして、神様に存在する性相と形状において、その性相を本性相と呼び、形状を本形状と呼ぶのです。また、陽性と陰性において、神様に存在する陽性を本陽性と呼び、陰性を本陰性と呼びます。

このように、あらゆる被造世界の原因者である神様にも二性性相が存在するというのが、とても大切な結論なのです。そして、この二性が神様の内においては円滑に調和し、授受作用を成しているというのです。

この視点は、唯物論的な対立物を内包すると見る見方とは完全に異なるのです。ですが、自然界をしっかりと観察すれば、そこには対立物ではなく、相対物の授受を発見するのみのことです。

【御言】

神様は

- ・本性相と本形状の二性性相の中和的主体であると同時に、
- ・本性相的男性と本形状的女性との二性性相の中和的主体としておられ、
- ・被造世界に対しては、性相的な男性格主体としていまし給います。

【感想】

ここでは、神様をどのようなお方なのかということを明確に説明しているのです。様々な宗教では神様を全知全能であるとか、愛の絶対的主体者であるとか、唯一無二の存在のお方であると説明しています。そのような宗教が明確に証すことができなかった、科学的アプローチで見つけられた神様の側面です。皆様はいかがでしょう。このような神様をご存知でしたか？

神様がこのようなお方であるので、神様の創造された被造物の理想像というものもこのような神様に似た物になるべきだという理由が現れるのです。ですので、性相と形状が中和的に一体化していると同時に、家庭において、夫婦、男女が和合し中和的に一体化し、神様の前にあつては、形状的な女性格対象として存在しているというのです。

では、私たちがそのような理想的な姿になっているのでしょうか。いいえ、そうってはいないと誰もが自覚されると思います。心の願うままに行動できない自分、さらに夫婦間においてもいさかや葛藤がうずまき、とても和合しているとはいえない現状があるとするならば、それは神様の構想された理想的な姿にはなっていないというのです。

なぜ、そのようになったのかという理由は墮落論で説明されます。ここでは、神様がどのような方であるのかということを明確に理解し、そこから人間の理想像を見ることもできることを紹介しました。神様についてもっと詳しく知りたいという方には天聖經で神様という章もありますし、統一思想では神様を思想的に見つめた原相論もあります。ぜひ、ご一読されてみてはいかがでしょう。

【御言】

神様と被造世界との関係

- ・被造世界は、無形の主体としていまし給う神様の二性性相が、創造原理によって、象徴的、または形象的な実体として分立された、個性真理体から構成されている神様の実体対象です。

【感想】

ここで紹介する真理は、この宇宙森羅万象、霊界も含めて、被造世界と呼びますが、それが神様から生じたということを明確に宣言しているのです。この世の科学はまだこの真理を受け入れていません。未だに宇宙の最初は大爆発だと言って、あたかも偶然的に生じたかのような理論を展開しているのです。ですが、私たちはそのような定説が間違っていることを明確に自覚している、最先端の科学者でもあるのです。この被造世界は神様によって創造された。この真実は、宗教に留まるべき教理ではないのです。今後、科学的な事実として認証されるべき内容なのです。

そして、象徴的な実体対象と形象的な実体対象が紹介されていますが、原理講論では明確に人間を形象的な実体対象と定義しており、人間以外の被造物を象徴的な実体対象として明確に区別しています。このような観点から、私たちの科学は進化論と真っ向から対立するのです。神様が明確に区別して創造されているので、猿はどんなに時間が経っても猿であって、人間にはなりえないという認識なのです。ただ、人間は墮落により万物以下のところまで落ちてしまったので、人間と動物の区別がつかなくなってしまうということであって、人間が随時復帰されるに従って、進化論の誤りは明確になると思います。

ここで、とても重要なことは森羅万象は神様から生まれたという事実、そして、人間とそれ以外の被造物は明確に区別されて創造されているという事実なのです。聖書をもとにしているキリスト教など、宗教はこの事実を受け入れているといえますが、科学もこの事実を実証する時はそう遠くないと私は見えています。

【御言】

万有原力

- ・万有原力は、神様が創造主として、永遠・自存・絶対者としておられるための根本的な力です。
- ・これはまた、被造物が存在するためのすべての力の根本でもあります。

【感想】

皆様は万有引力という言葉は聞いたことがあるかもしれませんが、万有原力は初めてかもしれませんね。万有とは全てのものに存在するというのです。つまり、私も、あなたも、万有原力によってエネルギーを得ているというのです。そのような存在するための根本的な力を万有原力といいます。

このようなことを見るとき、私たちは神様を離れては存在すらできない存在なのです。無神論の方々も神様の恩寵によって生かされているというのです。ですので、本然の人間は、神様から万有原力をふんだんに受けて、エネルギーに輝いているというのです。明るいという表現の明るさも、神様からのそのような要素をふんだんに受けていることを意味するのです。逆に暗くなるというのは、神様との関係がこじれて、万有原力を円滑に受けることができなくなった状態だということです。

このようなことを分かると、明るい、輝いた人生とは、この万有原力が豊かに受けられており、神様の授ける内容を自然と受けている人生をいうのです。決して、食べ物や飲み物などによるものではないのです。ですので、明るくなる秘訣というのがここにもあるのです。神様からの力をふんだんに受けるためには、神様から受ける様々なものを感謝して、神様としっかりとつながった生活をするということなのです。

ですので、性的な淫乱など、神様との関係が途絶すると、性格が暗くなるというのです。このように、万有原力をふんだんに受けているのかどうかというのが、人格的に健康かどうかのバロメーターにもなります。

私たちは生きています。これも神様の愛情ゆえに生かされているというのです。なぜかという、万有原力の存在がそれを物語っているというのです。この世は、そのような根本的な力を知らずにあります。これが医学会においてどれだけ画期的なことなのかと言うことも現代医学はまだ知りません。神様に対する信仰が深まることで病気を治療するという因果関係をまだ受け入れていないというのです。

皆様はいかがでしょう。そのようなエネルギーのような力を感じていますか。

【御言】

授受作用

- ・あらゆる存在の主体と対象が、万有原力により、相対基準を造成して、良く授け良く受ければ、その存在のためのすべての力、すなわち、生存・繁殖・作用などのための力を発生します。
- ・このような過程を通して、力を発生せしめる作用のことを授受作用といいます。

【感想】

すべての力は授受作用によって生み出されます。人間の生命力もそうであり、自然に存在する力というものもそうです。私たちの発展の原動力もこの授受作用によるものです。ですので、教会では円滑な授受作用を推進すべく、あらゆる努力がなされているのです。

人の話を良く聞いて、適切な内容を語りかける。これも言葉の授受作用なのです。ですが、授受作用は言葉に限りません。人間の活動、自然界の活動も授受作用によって発展しているのです。そして、これは個人に限らず、企業や社会、国家、世界においても成長し発展する基本的原動力は授受作用だということです。ですので、授受作用を崩せば、あらゆる存在は存在することすらできなくなるということです。

共産主義はこれに対して、この世は矛盾する対立物の闘争によって発展していると主張し、それを根拠に国家なども運営されています。ですが、私たちは闘争によっては決して発展するものはない。いえ、授受作用が壊されるために存在することすらできなくなるということです。

人間の成長も授受作用によるものです。家庭の幸福も夫婦間の円滑な授受作用が基本になります。この授受作用を円滑にする潤滑油のようなものが真の愛だということです。ですので、中心者と従うスタッフが反目しては決して教会は発展しないということです。また、中心の方針に反目する家庭も成長も発展もないということです。これはアベルカインの問題でもあります。本然の兄弟とは円滑な授受作用で一体化している兄弟であるという理由もここから出てきます。

すべての発展の鍵は授受作用にあります。では、皆様はいかがでしょう。どれだけ、授受作用を行い、どれだけ対立してきましたか。信仰者の従順さとはこのような授受作用を円滑にする体恤すべき素養だと私は思っています。

【御言】

正分合作用

- ・神様を正として、それより分立して、再び合性一体化する作用を正分合作用と称します。

【感想】

この正分合はとても大切な概念です。神様を中心として授受作用をすれば、それが再び一体化するということです。ですので、すべての一体化のポイントは授受作用にあるということです。

アベルとカインの一体化も両者の円滑な授受作用によります。夫婦の一体化も夫婦の円滑な愛情の伴った授受作用によります。親子の一体化もそうだと思います。このような流れを理解できれば、教会における一体化の方法論というものができるのです。

単に授受作用をすればいいというわけではありません。神様を正として、神様を中心とした授受作用をしなければならないということです。ですので、夫婦の和合も単なる夫婦間の交流の円滑化だけではなく、神様を中心とした愛情の授受作用が必要になるということがここからも理解できると思います。

唯物論にはこれと似た言葉に正反合という言葉があります。否定をし、また否定されたものを更に否定することで、事物は発展するという理論なのですが、統一原理はこのような概念を誤りであると明確に指摘しています。事物は否定による発展ではなく、相互肯定による円滑な授受作用に

よるものなのです。

もちろん、墮落人間においては、墮落性を否定し、サタンの血統に由来する性稟を否定する必要は信仰上も必要です。ですが、本然の発展の原則は授受作用です。本質的に求められるのは、授受作用を阻害するような自らの感情を否定するのが、より重要視されるのであり、引き寄せの法則もこのような授受作用と関係を持っているというのです。

意識で描き、その描いたイメージと実際の身体が円滑な授受作用をすると、それが合性一体化して実体化されるという理屈なのです。これも正分合作用なのです。皆様はいかがでしょうか。円滑な授受作用をいつも行っているでしょうか。それができないことが墮落の故の結果だということです。

【御言】

三対象目的

- ・正分合作用により、正(神様)と主体と対象と合性体が、各自主体の立場をとるときには、各々残りのものを対象として立たせて、三対象基準を造成し、
- ・お互いに授受作用をするようになれば、その主体を中心として、各々三対象目的を完成するようになります。

【感想】

私たちは三対象を愛することを学びます。よくこの世的な恋愛は異性である相手しか見えなくなることが往々にしてあり、対象が一点に集中することが一般的かもしれません。結婚しても、その愛情は子供の一点に集中し、配偶者を軽視するということがあります。ですが、私たちは三対象をきちんとバランスよく愛することを学ぶのです。

まず、神様を愛すること。この世のカップルは神様と関係のない愛をなしますので、神様との愛の因縁が本当に希薄になるしかありません。ですが、私たちはまず神様を誰よりも愛し、神様との親子の愛情の絆を結ぶのです。そのような因縁を確立したうえで、次に配偶者と夫婦の絆を結ぶのです。これで対象が二つになります。ですので、女性において、祝福を受ければ、神様を愛して教会の摂理にまい進するだけではなく、家庭でも配偶者を愛するために奔走するために、やはりこの世の夫婦とはその苦労の度合いが異なってきます。そして、子女が生まれれば、三つ目の対象として子女と親子の愛の因縁を結ぶのです。

良妻賢母とは良き妻であり、良き母親であるということで、2対象と円滑に愛情の授受作用ができていることを意味しますが、私たちはそれ以上に、神様とも円滑な愛情の授受作用をするということで、良妻賢母善女という姿が家庭理想になります。ですので、その苦労は一般社会の夫婦とはやはり比べられないほど大変なものになります。ですが、神様の願われる理想というものが三対象を愛することだと知り、神様が願われるがゆえに三対象を愛すべく様々な努力をしています。

ですので、私たちの育む愛情は、1対象の直線的なものでもなく、2対象の平面的なものでもなく、3対象の立体的なものだということです。よく、真のお父様はこの世の夫婦をぺちゃんこだというのですが、2対象しか愛せない平面的な愛情を意味していたのではと私は思います。そのような愛情に神様を愛するような愛情が備わると立体的になるとここでは語られているようにも私は思いました。

【御言】

四位基台

- ・正(神様)を中心として、二性の実体対象に立たされた主体と対象と、その合性体が各々三対象目的を完成すれば、四位基台を造成するようになります。
- ・四位基台は、神様の永遠なる創造目的を完成した善の根本的な基台です。

【感想】

四位基台は正分合作用を空間的に捉えた概念です。私たちはこの四位基台を形成することを人生の目的としているのです。そして、四位基台の完成された姿を、個人、家庭の理想形としているのです。個人においては、心と体が神様を中心として円滑に授受作用を行い、一体化すること。夫婦においても、夫と妻がよく愛の授受作用を円滑に行い、神様を中心として一体化し、子女を繁殖して生み育てることを人間としての人生の理想形とするのです。このように四位基台は善の根本的な基台となるのです。

ですので、私たちは授受作用を円滑にすることを第一に考えるのです。背後の怨讐関係があったとしても、当事者において、お互いに為に生きることを通じて、授受作用を行うことを目標とし、努力するのです。そうして、蕩滅が清算され、一体化した時には無上の喜びがあるというのです。

このように私たちの人間関係の理想形とは神様に侍りながらお互いに愛の授受作用を通じて、一体化することであり、そこからすべての発展が生まれるということを学んでいるのです。日本の組織における中心性と一体化もこれに通じます。

では、皆様の家庭ではいかがでしょうか。夫婦が愛し合っているとしても、神様に侍っているのでしょうか。神様に侍っていると言っても夫婦が円滑に授受作用をしていると言えるでしょうか。私たちはそのような不足な面を補えるように成長し、人格を磨いています。このような理想像が一般社会の平面的な理想像とは異なるというのです。皆様の家庭はこのような幸福の基台を築けていますでしょうか。

【御言】

創造目的

・神様が被造世界を創造された目的は、人間をはじめ、すべての被造物が、神様を中心として四位基台を完成し、三大祝福(創1:28)のみ言を成就して、天国をつくることにより、善の目的が完成されたのを見て、喜び、楽しまれることでした。

【感想】

神様が被造世界を創造された目的。ここに神様の人間に託された目的というものがあるのです。ですので、人間は結果的な存在であるために、創造された目的を成就しようとするやうに充実感と生き甲斐を感じるようになっており、それをはずれて関係のないことをしていると、虚無感と虚しさを感じるようになっていくというのです。

ですので、この道を知った人は、苦勞が多くても、その目的が神様の創造理想にかなっているために、充実感とやりがいというものを感しているのです。この点が重要なポイントなのです。私たちの幸福とは、神様の創造理想から離れてはありえないということなのです。ですので、御旨と関係のない天国、摂理と関係のない天国と言うものは存在しないということなのです。

そして、どんなに摂理が忙しいとしても、この三大祝福を忘れてはならないというのです。摂理ということで、天的に教会の活動にまい進しても、家庭において、四位基台を形成できなければ不幸だというのです。ですから、食口は大変なのです。天の摂理は一番に重要なのですが、だからといって家庭を顧みないというのではないというのです。真の家庭運動はそうように神様の御旨にまい進しながらも家庭において夫婦で円満な愛情のこもった授受作用を行い、その愛情がさらに子女に注がれるというものになるのが理想的なのです。

そして、そのような理想を目指して歩んでいるのが私たちなのです。この創造目的は、私たちの生まれた目的でもあります。そして、神様が私たちを創造された目的でもあります。この目的があつてこそ、私たちの存在価値が明確になるというのです。そして、このような目的を知らないということは、自分の本当の価値を見出すことができていないということをも意味するのです。

どうでしょう。皆様には自分の価値が見えていますか。

【御言】

三大祝福

- ・神様の第一祝福は個性を完成することにあります。個性を完成しようとするれば、神様の二性性相の対象として分立された心と体が、授受作用によって、合性一体化(個体)して、神様を中心として個体的な四位基台をつくらなければなりません。
- ・第二祝福を成就するためには、個性を完成したアダムとエバが夫婦となり、子女を生み増やし、神様を中心として家庭的な四位基台をつくらなければなりません。
- ・第三祝福は、万物世界に対する人間の主管性の完成を意味し、人間と万物が合性一体化(被造世界)することにより、神様を中心として主管的な四位基台が完成されなければなりません。

【感想】

私たちの人生において成就すべき目的がここに集約されています。まず、個人において、心と体をつ一つにすることなのです。これは力によってなされるものではありません。ある人は強靱な精神力が身体を従わせると考えておられるかもしれませんが、原理ではそうではないのです。心と体をつ一つにするのは、まず神様を中心とした生活をする事。そして、その神様から注がれる真の愛をもって、心と体が円滑な授受作用をすることなのです。円滑な授受作用をするためには相対基準を合わせなければなりません。ですので、私たちは常に心で身体の状態を観察し、身体から発せられる信号を理解して、それに応じた適切な行動を指示しなければならないというのです。それも、愛によって初めて成されるというのです。ある人は根性だと言って体をいじめる人もいますが、これも原理的に見ると間違っていると私は思います。身体を屈服させることができるのは、真の愛によってのみです。決して力ではないことを、この第一祝福は語っています。

そして、第二祝福の家庭理想においても、夫婦は神様を中心とした授受作用によって一体化するというのです。その授受作用の潤滑油と成るのも神様の注がれる真の愛だというのです。決して、力や経済力、生活力をもって夫婦が一体となっているわけではないという根本的なことを述べているのです。夫婦は愛情によって授受作用することによって一体となるという基本的なことであり、その愛情は人間に由来するのではなく、神様に由来しなければ永遠性がないというのです。

第三祝福は万物を愛情をもって主管することを述べています。私たちは万物や力を法則、指示や命令で支配しているわけではありません。コンピューターなどを扱っていると、コンピューターは命令で動くと思っている人も多いのですが、本来の万物主管は愛情で主管することを意味します。ですので、コンピューターを愛し、コンピューターを大切に使う人のもとにおいては、コンピューターは喜ぶというのです。また、逆に乱暴に扱えば、コンピューターも壊れやすくなるというのもその道理なのです。万物を愛する人に万物は寄ってきます。万物を酷使する人には万物は逃げ出します。これはお金もそうなのです。では、皆さん。お金の本当の愛し方をご存知ですか。これを体恤した人はお金で悩むことはほとんどないというのです。

【御言】

被造世界の創造過程

- ・創世記1章にある天地創造を完了するまでの6日というのは、日の出と日没の回数によって計算される6日ではなく、創造過程の6段階の期間を表示したものです。
- ・これは被造世界を構成している各個性体が完成されるに際しても、ある程度の期間が必要であったことを意味します。

【感想】

皆様はよく魔法関係の映画で、魔法使いが呪文を唱えていろいろな奇跡を起こすのを見てきたかもしれません。ですが、それは映画の話であって、実際の地上世界は、時間と精誠を込めて、万物が誕生しています。農業をする人は農作物が簡単に呪文で飛び出すようなことは信じないで

しょう。動物を飼っている人は、動物がフツと浮き出すように現れることを信じないでしょう。みな、小さな種から生まれて、育てられて、大人の動物になり、完成された農作物になることを知っています。神様の万物の創造、天地創造もそうだということです。神様が語られたから、すぐに呪文のように現れたわけではありません。ここに示されているように6段階の創造過程を通じて生まれているのです。

ですので、物事が完成するためには時間がかかるということが分かるのです。これを知っているのと知らないのとでは雲泥の差になります。これを知る人は、時間のかかることを知っていますので、毎日、コツコツと時間をかけることで完成しようとします。ですが、それを知らない人は、土壇場でも一夜漬けでできると思ってしまうために、時間をかけずに完成しようとして失敗します。何ごとともそうなのです。時間のかかることを知っている人は、待つことを知っている人です。待つことを知らない人は、この原理が分かっているということかもしれません。

皆様はいかがですか。物事の完成には時間がかかるということを理解していると思いますか。

【御言】

被造物の成長期間

- ・被造物の成長期間は、蘇生期、長成期、完成期の秩序的三段階です。
- ・神様は被造物が成長期にある場合には、間接的な主管をされるので、この期間を間接主管圏、または原理結果主管圏といいます。
- ・万物は原理自体の主管性、または自律性により、成長期間を経過することによって完成します。けれども、人間は、ここに自身の責任分担を全うしながら、この期間を経過して完成します。

【感想】

私たち人間は自然のままでは完成することができません。責任分担があつてこそ完成することができるというのです。では完成するとはどういうことなのでしょう。個人においては、心と体が完全に神様を中心として一体となり、神様と人間が一体となることなのです。そのような境地には、人間は成長期間を経なければ完成できないというのです。

では、成長期間の間接主管と完成した直接主管とは何が違うのでしょうか。間接主管圏では神様は結果のみを見られます。ですので、結果主管圏といいます。そのような時にはある意味、結果がすべてというような歩みになります。ですので、様々な帳尻あわせが可能なのですが、直接主管圏ではその結果を出す過程においても神様が共に成されるというのです。ですので、結果を出す過程も神様が共にあるのかということが問われ、歩む動機や路程が問われます。

ですので、直接主管圏時代は責任分担とは言われません。神様が共にある歩みなので、精誠と呼ばれます。では、皆様はどうでしょうか。まだ神様と一体となっていないと思うのであれば、探しても責任分担を全うすべきなのです。そして、責任を果たすことで、完成に近づかなければならないのです。

今の時代は恵まれています。責任分担が何であるかということが明確になっているからです。責任分担を探す苦労はないというのです。後は進むかどうかなのです。ですので、実践する人が成長し、実践して実績を出してくる人が完成するという原理が明確なので、私たちは実績を追及され、実践を求められると思います。ではどうでしょう。皆様は責任分担は明確ですか。そして、その明確な責任分担を実践していますか。もし、それが確かならば、あなたは確実に成長しているということだと思います。

【御言】

無形実体世界と有形実体世界

- ・被造世界は、神様の二性性相に似た人間を標本として創造されたので、
- ・被造世界には、体のような有形実体世界と、心のような無形実体世界があります。この二つの世

界を総合したものを、宇宙と呼びます。

・人間が肉身を脱げば、その霊人体は、無形世界に行って永住します。

【感想】

ここでは死後の世界の紹介がされています。人間は地上生活を死という場面を通じて終えます。では、その後の世界とは存在するのでしょうか。創造原理では霊界の存在を明確に紹介しています。人間は地上の死を通じて、霊界に入り、そこで永住するということです。ですので、地上での死別が永遠の別れではないのです。自らも肉体の死を迎え、霊界に行くようになると、これまで他界した様々な人と出会うようになっているということです。

そのような霊界をここでは無形世界と呼んでいます。形が無いという意味ではありません。霊界に行っても、私たちは霊人体という体を持ち、地上にいたときと同じような姿をして、存在します。ですので、煙のように形が消えてしまうわけではありません。ですが、地上の三次元世界に存在する肉体を離れますので、空間的・時間的制約がなくなるということは、私たちも学びます。

ですので、愛する人と死別したとしても、自らが霊界に行けば、会うことができるのです。ですが、そのために自殺することは神様の願いではありません。地上で生きている理由と言うものが明確にあるからです。

人間の存在は無限なのです。決して、地上の100年足らずの存在ではないのです。そのことを知る人と知らない人とでは人生観が大きく異なります。何をしても死ねば終わりと思っている人と、死後の世界においても幸せに生きるために、今を貴重視して生きる人とでは自然と結実も異なってきます。

霊界は確実に存在します。私たちは肉体の死後において、その世界で永住するのです。その世界の存在を証す為に生きている時に霊界を垣間見る人もいます。どうでしょう。皆様は霊界の存在を信じますか？

【御言】

第2章 墮落論

- ・今まで罪の根がいったい何であるのか、この問題を知る人は一人もいませんでした。
- ・ただキリスト教信徒のみが、聖書を根拠として、人間始祖アダムとエバが善悪を知る木の果を取って食べ、それが罪の根となったということを漠然と信じてきました。
- ・彼らは、善悪を知る木の果が、文字どおりの何かの木の実であると信じてきたのです。

【感想】

この墮落論では罪惡世界の根源的原因について学びます。そのような罪惡の根源をここでは罪の根と呼びますが、その罪の根というものがいったい何であるのかを解明したのは御父母様が人類歴史上初めてだということです。クリスチャンも聖書を根拠に罪の根の存在を知ってはいたのですが、聖書の大部分が比喩と象徴で書かれていたために誤解があったということです。

では、キリスト教徒は罪の根をどのようなものだと思っていたのでしょうか。それが善悪を知る木という木が存在して、その実をとって食べたのが原因だと文字通りに解釈してきたということです。ある人は桃の木だとか、ある人はリンゴの木だとか。そして、その木になっている実をまさに口でガブリと食べたので、それが罪の根になったと信じていたのです。

皆様はいかがでしょう。何か変なものを食べたので、自分が罪人になってしまった。愛の病気にかかってしまったというようなことは医学的にも変に思いますよね。聖書の時代ではるか昔で医学も現代のように発達していません。そのような時代に語られた内容であるために、ここには何かを比喩したものであるということが明白だということです。

人間は病気になるようなものを食べると、自然と排泄するように人間とはできており、それができなければ、肉体的な病気になります。ですが、人間の罪の根というものは愛の病気であり、肉体的

な病気を指してはいません。

では、その真相とはどういうものなのでしょう。これから墮落論を学びながら、ああ、なるほどと納得できれば幸いです。

【御言】

- ・聖書の多くの主要な部分が象徴と比喻でもって記録されています。それでは善悪の果は何を比喻したのでしょうか？
- ・これを解明するために「善悪を知る木」と共にあったという「生命の木」が何であるかをまず調べてみることにします(創2:9)。

【感想】

私たちが通常のキリスト教と違うのは、聖書の重要な部分が比喻と象徴で記録されていると判断し、その比喻が何を意味しているのかを明確にしている点なのです。そして、聖書をいくら探しても、善悪を知る木というのが見当たらないので、その善悪を知る木と一緒にあったとされる生命の木が何であるのかということを調べてみようというのです。このように、私たちは罪の原因というものを解明するにおいて、聖書の比喻が何を意味しているのかということを学びます。

文鮮明先生も墮落論を解明される時、サタンから幾多の試練を受けられたといいます。そして、その試練の末に勝ち取られた内容を私たちに教えておられるというのです。ですので、これは単なる仮説でもなく、学説でもないというのです。それが真理であるゆえんだと思います。

では、皆様は、この善悪を知る木と生命の木が何を象徴されたものだと思いますか。この木が単なる万物ではないというのです。では、何なのでしょう。

【御言】

生命の木と善悪を知る木

- ・「生命の木」とは、すなわち、「創造理想を完成した男性」です。それはすなわち、完成したアダムを比喻した言葉です。
- ・「善悪を知る木」というのはその木は、「創造理想を完成した女性」を象徴するものです。それはすなわち、完成したエバを比喻した言葉です。

【感想】

ここで聖書に書かれている「生命の木」と「善悪を知る木」が何であるかということが明確にされます。私たちはこの部分を比喻であると解釈し、それが何を比喻するのかというと完成したアダムと完成したエバを比喻していたと解釈します。これは文鮮明先生が様々な啓示と実際の調査をもって解明されたと私は聞いています。ですので、墮落の根源が善悪を知る木の果を取って食べたということによるということは、エバがその墮落において、大きな役割を果たしたということが分かるのです。

では、エバはどのような過ちを犯したのでしょうか。それは、後ほど、説明されてゆきます。幸福な家庭のポイントは女性が握っています。ですので、どんなに優秀な男性も結婚で失敗すれば不幸になるものであり、どんなに平凡な男性でも良き伴侶と結婚できれば幸せになれるのです。では、教会で祝福を受ける男女とはどんな男女なのでしょう。それが神様から見た善男善女であるということです。祝福を受けるまで私たちはそのような人間を目指して人格を磨いてゆくのです。

ですので、私たちは純潔を叫んでいるのです。皆様はいかがでしょうか。良き男性と結婚できれば幸せになれると思いますか。ですが、その結婚している自分が問題だというのです。

【御言】

蛇の正体

- ・エバを誘惑して、罪を犯させたものは蛇であったと聖書に記録されています(創3:4～5)。
- ・蛇として比喻されているこの霊的存在は、元来善を目的として創造されたある存在が、墮落してサタンとなったのです。
- ・この蛇は、天使を比喻したものです(ペテロⅡ2:4)

【感想】

人間の墮落においては、人間だけが存在するわけではありません。聖書にはそこに蛇が登場するようになっています。蛇がエバを誘惑して、人間を墮落させたというのです。この蛇というものも、私たちがこの地上で目にする蛇ではなく、何かを比喻したものであると墮落論は説きます。

では、この蛇は何を比喻したものののでしょうか。ここでは、簡単に結論だけが書かれています。その蛇とは天使を比喻したものであるということを、ここに明確に示しているのです。この事実はとても重要なことを意味します。

ここにもあるように、人間は霊的な存在によって墮落させられる危険性があるということなのです。墮落とはどういうことだったのかは後に説明されますが、先に紹介しますと、人間と天使との間において性的な関係が成立してしまったということなのです。

つまりは、将来を約束されたフィアンセのいる女性が、そのフィアンセとは別の霊的な存在である天使と愛の関係を結んでしまったというのです。これによって、人間が墮落したということなのです。

日本でもこの点はとても気をつけなければならないことなのです。日本には霊界を取り締まる法というものが存在しません。つまりは霊的な無法状態になっており、悪霊が容赦なく地上の人間を誘惑し、性的な関係をもってしまうという悲劇が続いているのです。

ですので、私たちは相対者以外の異性との肉体的な性的関係をもってしまうことを厳しく禁じるのみならず、霊的な問題も取り上げ、悪霊を呼んでしまうような淫乱な映像などを見ることも、聞くことも厳しく禁じているのです。

ですが、女性として考えてみてください。配偶者の男性が絶対に浮気もしない、淫乱な映像も見ない、聞かないということは、健全な家庭生活の前提になるとは思いませんか。そして、この世ではそのような男性を探すのは本当に難しいのではないのでしょうか。私たちの教会の育もうとする善男善女とはそのような性的な清さを体恤した人格者だと私も思っています。

【御言】

天使の墮落と人間の墮落

- ・ユダ書6～7節を見ると天使が姦淫によって墮落したという事実を知ることができます。
- ・創世記3章7節を見るとアダムとエバが下部で罪を犯したという事実を推測することができます。
- ・このことからみて、人間と天使との間に淫行関係が成り立ったであろうということは、うなずくことができます。

【感想】

ここで明確にされているのが、人類の最初の罪というものが天使との姦淫にあったことが明確に提示されているのです。人間が天使と性的な関係をもってしまったというのです。人間が愛と性的関係において相対として創造されているのは人間だけです。言ってみれば人間は人間以外のものと交わってしまったということが大きな問題となってしまったのです。それであるがゆえに、私たちは霊的な守りをしっかりと固めておく必要があるのです。肉体のある人間が強制的に女性と性的な関係をもつとそれは犯罪として罰せられます。ですが、霊人体を取り締まる法律というものは日本にはありません。ある意味、日本は霊的な無法地帯でもあるのです。それであるがゆえに、私たちの教会でも霊界の整理をし、絶対善霊の皆様の協助と守りの中で歩むことを推奨しています。

ですので、青少年の純潔という問題は、私たちは単に肉体的な関係を持つことのみを意味するのではありません。霊的墮落という問題を知っているがゆえに、そのような霊と相対基準をあわせないような戒めがあるのです。ですので、イエス様が思っただけでも姦淫をしてしまうと聖書で述べられているのも、このような霊的な性関係をしっかりと述べておきたかったからだと思います。

ですので、金縛りならまだ軽いほうなのです。霊的に性的関係を強要するような悪霊から自らを守るということはある意味とても深刻なことなのです。ですが、この世ではそのような霊的な感性も啓発されていませんから、幽霊を怖がる程度なのですが、日本はその意味においてもっと霊的に整理されなければ、青少年は健全に育たなくなっているというのも現状だと思います。

特に霊的に敏感な女性は気をつけてください。背後に善霊と悪霊がしのぎを削って戦っていることがあるということです。そして、悪霊に相対すると、とても大切なものを奪われてしまう危険性もはらんでいるということをここでは紹介しているのです。ぜひ記憶にとどめておかれることを祈ります。

【御言】

善悪の果

- ・善悪の果とはエバの愛を意味するのです。
- ・エバが善悪の果を取って食べたということは、彼女がサタンを中心とした愛によって、互いに血縁関係を結んで、悪の子女を繁殖したことを意味するのです。

【感想】

ここに明確に取って食べたと言われる善悪の果が何を比喻したものかということが分かります。エバが天使を愛してしまったということなのです。本来、人間同士が愛し合うように創造されていたにも関わらず、それを外れて、人間であるエバが天使の愛情関係になってしまったということです。

この被造世界を見るとき、自然のままの状態で、動物が他の種類の動物とつがいになって子供を繁殖するということはありません。これは、人間においてもそうだったのです。その本来の姿を逸脱して、人間が天使と愛情の関係を結び、それに留まらず、血縁関係を結んだということは、性的な関係をもってしまったということまでも意味するのです。このような行いを人間はしてしまったというのです。この性の乱れが諸悪の根源になっているというのです。

人間の世界には人間以外の動物と性的な関係をもつようにまで乱れてしまった傾向もあります。人間の最も神聖な生殖器に動物の性器や物質などを受け入れてしまうというとてもない文化まであるというのです。

人間は様々な犯罪撲滅の努力を重ねてきました。ですが、世の中の犯罪を減らすためには、まずもって、このような性の乱れを正さなければならないというのが、私たちの墮落論の提示する内容だと思います。ですが、今の世の中にはそのような性のあり方を個人の嗜好のように捉えて、規制する動きが見られません。

私たちが純潔を提唱し、貞操を守ることを推進している中には、もちろんこのような性の乱れを正すことも含まれてくると思います。墮落の根源とは人間が人間以外の存在と性的な関係を結んでしまったがゆえに、愛の病気が生じるようになってしまったということなのです。

ですので、これまで人類は人間としての本来の血統を相続してきたのではなく、天使の血統を受け継いできたということなのです。それも善なる天使ならまだしも、悪魔となってしまったサタンの血統を受けてきたというのです。したがって、人間は自然状態では地獄をつくってしまうという結論になり、人間に教育の必要性を歴史は説いてきたのだと思います。

【御言】

罪の根

- ・罪の根は、人間始祖が蛇に表示された天使と不倫なる血縁関係を結んだところにありました。
- ・したがって、彼らはサタンの悪の血統を繁殖するようになったのです。

【感想】

世の中の罪惡の根源が天使と人間との間に結ばれた本然ではない血縁関係によるものなのです。血縁関係を結ぶということは性的な関係をもってしまったことを意味します。人間の子女は生殖器を通じて繁殖されます。その生殖器が天使によって汚されてしまったというのです。

このようなことを解明された墮落論を根拠に現存する社会惡の根源が性的な淫乱によるものであるということを私たちは学んでいます。ですので、そのような性の乱れを正すためにも、純潔を叫び、結婚後においては貞節を守ることを非常に重要な戒めとしています。

ですので、人間には善惡の二面性があるというのです。神様の創造時に与えられた神性と、墮落によってサタンより受けてしまった悪性が人間には混在しているというのです。ですが、これまでの人類は神様に対する無知により、サタンの思うがままの人生を生きてきたと言っても過言ではないのです。

ですので、私たちはまずもってサタンとの関係を否定する必要があるために、教会で信仰を持つようになると様々な否定があります。そして、サタンとの関係を切る中で、私たちは自分に本来眠っている神性に気づくようになり、墮落性という問題を解決しながら、祝福への道を歩みます。ですので、私たちはサタンとの関係を結ぶ行為を惡と見なし、神様との関係を修復する行為を善と見なします。ただ、現代科学は靈界の存在を未だに未知の領域に置き去りにしており、その結果、このような靈的な存在であるサタンの存在も立証できてはいないのです。

私たちはそのような靈的な問題を理論的に熟知して、靈界と共に幸福な人生を歩む方法を提唱しているのです。先祖の救済もその一環だと思います。皆様はいかがでしょうか。自分の中に惡魔の血が流れているという事実を受け入れることができますか。それができてこそ、初めて救済の価値がどれほど大きいかを自覚できると思います。この罪の自覚ということが宗教では大きなポイントともなっているのは、ご存じの方も多いのではと思います。

【御言】

第3章 人類歴史の終末論

終末の意義

- ・墮落人間を救おうとなさる神様の復帰摂理によって、終末がくるようになります。
- ・サタン主權の罪惡世界が、メシヤの降臨を転換点として、神様主權の創造理想世界に転換される時代を終末といいます。
- ・したがって終末とは、地上地獄が地上天国に変わるときをいうのです。
- ・それゆえに終末は、キリスト教徒たちが信じてきたように、天変地異が起こる恐怖の時代ではなく、喜びの日が実現されるときなのです。
- ・現代がすなわち終末なのです。

【感想】

ここでは、今の時代というものが、神様の目から見ればどのような時代なのかということが紹介されています。ここにもあるように、現代が終末なのです。メシヤとして真の御父母様が降臨され、これまでの罪惡の地上地獄が今や神様の創造理想世界へと転換され始めているというのです。そのような時代において、何が起きるのかというと、キリスト教徒の方々が信じているような天変地異は起こらないというのです。これは聖書を文字通りに解釈した為に起こる誤解であり、その内容も比喩と象徴で記述されているとする原理では、解明された現象が起こりつつあります。

この終末は世界や社会という大きな範囲にだけ適用されるものではありません。個人にも終末があり、家庭にも終末があるというのです。私の一個人においてもメシヤと出会うことが人生においてメシヤが降臨されたことであり、御父母様を信仰して生みかえられてゆくことは、まさに地上の地獄から理想世界へと転換されている内容そのものになります。個人がそうであり、家庭がそうだというのです。

ですので、今の人生が個人的に、あるいは家庭的に地獄だと思っている人は、御父母様と出会うことによって救われるというのです。それは、地獄の苦しみから解放され、神様の創造理想世界へと転換されていくからなのです。皆様はそのような時代的な恩恵を受けているというのです。

ですので、私たちは、地上地獄で苦しむ人に御父母様と出会わせてあげることによって、救済運動を展開しているというのです。伝道とは本来、そのようなものだということです。

【御言】

終末の徴候

・ペテロⅡ 3 章 12 節に、『終末には、天は燃え崩れ、天体は焼き失せてしまう』と記録されています。

・ヤコブ書 3 章 6 節に、『舌は火である』と言われたみ言からすれば、火の審判は、すなわち舌の審判であり、それはとりもなおさず、み言の審判であるということを知ることができます。

【感想】

聖書には人類歴史の終末について様々なことが書かれています。その例としてペテロⅡ 3 章 12 節があります。これを文字通りに解釈すると、天が燃えるとはあたかも核兵器か惑星が地球に落下して空が燃えてしまうというような解釈になります。天体が焼き失せてしまうというのですから、地球が火の海になり、爆発でもしてしまうのではないかというような解釈になってしまいます。

ですが、聖書を見てみると、ノアの大洪水の後、神様はもうこのようなことはしないというような記述も残されています。では、この終末の記述は何を意味するのでしょうか。これは、目に見える存在世界のことをいうのではなく、心の世界、様々な価値観が崩壊するということの意味しているというのです。

現代に至り、伝統的な価値観が崩壊し、共産主義の挑戦もあって、従来の価値観や判断基準がどんどん崩壊しています。ですが、終末に至り、真理がメシヤによって語られ、真理が広く世の中に浸透するようになると、そのような従来の価値観は偽りの価値観であることが白日のもとにさらされ、消えてゆくというのです。そのような時代の変化を述べていると私たちは解釈します。

ですので、旧態依然たる古典的な価値観に執着してしまうと、メシヤの語られた新しい真理を受け入れられなくなり、審判されてしまうということをここでは明確に語られています。私たちも御言を受け入れる中で、自らの中にあつた習慣的従来の価値観が崩壊したことを覚えておられると思います。これが、まさに個人的終末の現象だということです。そして、御言の審判とは真理が明確になり、従来の自分がいかに真理に合わない存在であるのかを自覚することを意味しており、その過去を悔い改めることがまさに真理の審判によるものなのです。

どうでしょう。皆様は御言を受けて変わりましたか。そのように終末とは外見的に訪れるのではなく、もっと内面的に訪れるというのがここでの解釈だと思いました。

【御言】

終末と新しい真理と我々の姿勢

・神様は、墮落によって無知に陥った人間を、神霊と真理により、創造本然の人間に復帰していく摂理をされます。

・神霊と真理とは唯一であり、永遠不変のものです。無知の状態から、復帰されていく人間に、それを教えるための範囲、それを表現する程度や方法は、

・時代に従って異ならざるを得ません。したがって、今日の知性人たちに真理を理解させるためには、より高次の内容と、科学的な表現方法によらなければなりません。これを新しい真理といいいます。

【感想】

ここで紹介されているポイントは聖書というものが絶対的な真理ではなく、聖書の書かれた時代における人々の程度に応じた真理であるということを述べています。ですので、現代において、高度に発達した科学的な社会においては、聖書の内容だけでは現代人を感化するには不十分となっており、その内容をさらに高次なものとして、科学的表現をもって説明する真理が登場しなければならないというのです。その真理というものが、今、ここで紹介している統一原理なのです。

ですので、聖書の文字にのみとらわれていると、かつて律法学者がイエス様を排斥したように、私たちの教えを異端だとして排斥する立場にもなりかねないというのです。ここで、とても大切なことは神様が人間を復帰されるにおいて、真理だけを用いられるのではないということなのです。神霊と真理によって復帰されるというのですから、私たちはその神霊を感知するために霊的な感性を啓発する必要もあるというのです。そのために、私たちは訓読だけではなく、祈りもとても重要視するのです。御言の字面を追いかけるだけではなく、祈りながら拝読することで、文脈に流れる御父母様の心情に触れることもできるというのです。

ですので、訓読とは単なる真理を理解するための読書というものではなく、霊的な感性も研ぎ澄ませながら、読んでいる内容から心情的なものを感じ取る内外両面の役事があるということを私たちは理解しています。

御父母様の御言は聖書のあいまいな比喻や象徴的内容を明確に説明されており、さらに現代科学の最先端をも進むような高度な内容になっています。ですので、御言があまりにも高次で自分に相対しないと思う人は素直に聖書を読むことも大切だと私も思います。そして、自分の程度に応じた真理を受けて、成長することが何よりも大切なのではないのでしょうか。

ですので、今の時代は、その時代的な恩恵によって、自分の心霊に応じた真理を知ることができるになっているというのです。聖書を知らない人にいきなり原理とは難しいかもしれません。ですが、そのような人に聖書に流れる神様の愛を紹介しつつ、新約聖書の心情圏を育むことができれば、御父母様の御言はより感動的に、また魂の喜びも格段に高いものになると思います。皆様はいかがでしょうか。御父母様の御言に真理を見出していますか。

【御言】

第4章 メシヤ降臨とその再臨の目的

十字架による救いの摂理

- ・イエス様がメシヤとして降臨された目的は、地上に天国を建設されるところにありました。
- ・それでは、十字架の贖罪により、すべての信徒たちが創造本性を復帰し、地上天国を成就できるようになったのでしょうか。

① いかに信仰の篤い信徒であっても、神様と一体となっていないために、

② 贖罪や祈祷の信仰生活が必要であり、

③ 子女に原罪を遺伝させています。

- ・それは、創造本性を完全に復帰することができないという事実を、物語っています。

【感想】

クリスチャンの方は、イエス様が私たちのすべての罪を背負って十字架に架かれたので、私たちは完全に救われていると学びます。ですが、私たちは、その十字架による贖罪が不十分なものであることを説明しています。ですが、私たちはイエス様の救いがまったく無力だとは一言も言っていない。その霊的な救いの恩恵は、聖書を知らない人にとってははかり知れないものがあります。ただ、イエス様の使命完遂において私たちはクリスチャンの方々とは異なった観点を持っています。それは、イエス様は使命を完遂できていないという見方なのです。

その理由がここでいくつか紹介されてます。まず、信仰の篤いクリスチャンの方々が神様と一体となれていないということなのです。そして、原罪を遺伝させてしまっているがゆえに、どれだけ生ま

れてもすべての人間が贖罪を受けなければならないという現実なのです。そこに血統の問題が入ってきますが、私たちの血統転換は、血統転換を受けたカップルから誕生する子女には原罪がないということなのです。その点が既存のクリスチャンとは大きく異なる点なのです。ですが、信仰が未熟な段階で血統転換を受け、原罪がいかなるものかも分からないでいるとするならば、それは天の恩恵に対する無知となってしまいます。

ですので、既存のキリスト教での信仰では創造本性を完全に復帰することができないという観点であると同時に真の御父母様は完全に神様と一体となられ、創造本性を完全に復帰されていると私たちは見ているのです。

ですので、私たちが祝福を受け、血統転換を受けた後も、祝福前と同じような習慣的生活をしていると、その価値や恩恵に気づかないということもあるのです。原罪がなくなっているということが何を意味するのか、そして、信仰の篤いクリスチャンが待ち焦がれていた救いを私たちが先駆けて受けていることに、皆様は喜びと感謝の心情をお持ちでしょうか。生活苦が問題なのではありません。神様が子女として愛してくださることに、どれほどの感謝があり、その愛に報いる心情が芽生えているのかということが、私たちも問われるのです。

【御言】

十字架の贖罪による救いの限界とイエス様再臨の目的

- ・ユダヤ人たちがイエス様を信じないで、肉身はサタンの侵入を受け、殺害されたので、信徒の肉体的救いを完成することができませんでした。
- ・しかし、十字架の贖罪の復活で、霊的救いの基台を完成され、霊的救いの恵沢だけを受けるようになりました。
- ・したがって、イエス様は霊肉ともに救いの摂理の目的を完遂なさるために、地上に再臨されなければなりません。

【感想】

真の御父母様の語られる御言の重要なポイントの一つは、イエス様は人類の救いを完成することができなかったということなのです。クリスチャンの方々はイエス様は完全に勝利され、十字架の救いで救いは完結されたと信じています。そのような信仰を持っている人において、この事実を受け入れることは簡単なことではないと私も思います。幸いにして、私の場合にはそのような信仰をもっていませんでしたので、そうですかと抵抗なく受け入れましたけど、既成のキリスト教が私たちを異端と呼ぶにはそのような理由があるということです。

ですが、イエス様が十字架で救いの摂理を完結されているとするなら、なぜ再臨する必要があるのでしょうか。何をするために再臨されるのでしょうか。その理由が明確にならないということです。ですが、御父母様はイエス様とも霊的に対話され、イエス様のことも本当によく御存知で、その上でこの原理を発表されています。イエス様は肉体的な救いを完成することができなかったのです。

ですが、真の御父母様はその未完成の肉体的救いも完成されたということです。ですので、霊肉共に完全にあがなわれた存在が私たち祝福を受けた祝福家庭なのです。ですが、日本の文化の中では救いの定義というものが日常生活の生活苦から救われることと混同しているために、救いの実感がないというような誤解も起きていることもあります。

原罪の認識のない人においては、原罪が解決されたとしても、その恩恵を感じ得ないというのが道端から呼び集められた人間の悲しさかもしれません。ですが、私たちは神様を親と呼び、そして、その神様から親としての愛情を受ける立場に復帰されているのです。そのような恩恵を受けることができるのも、救われたからなのです。ここでも、紹介されているように、イエス様は肉体的救いを完成することができませんでした。ですが、御父母様は霊肉共の救いを完成されたということを紹介しておきます。

【御言】

イエス様の十字架の死

・イエス様の十字架の死が、神様の予定だったのでしょうか。

① 聖書に表された使徒たちの言行を見ると、イエス様の死を恨めしく思い、悲憤慷慨しました。

② 神様の摂理から見ると、イスラエル選民を召され、メシヤを迎える準備をされました。

③ イエス様自身も、ユダヤ人に対して、自分をメシヤとして信ずることができるように語り、行動されたということを、聖書を通して知ることができます(ヨハネ 6/29、マタイ 23/37、ヨハネ 10/38)。

・このような内容から見て、イエス様の十字架の死は、神様の予定から起こった必然的なことではなく、ユダヤ人たちの無知と不信の結果に起因したものであることを知ることができます。

【感想】

この部分で私たちは既存のキリスト教とは大きく異なることを真理としているのです。既存のキリスト教はイエス様は十字架に架かれるためにこの地上に来られたと説明します。そして、人類の罪を背負われて亡くなられたと。そして、十字架の死をもって使命は全うされていると信じているのが大部分だと思います。ですが、私たちはここで掲げられている理由により、イエス様の十字架の死が必然的なものではなかったということを学びます。ですので、既存のキリスト教とは大きく異なる信仰感を私たちは持っています。ユダヤ民族の不信ゆえにイエス様は十字架にかけられてしまったという視点なのです。

ですので、イエス様の使命は全うされておらず、再臨されなければならないその必然性があるということを原理は語っています。よく、私たちは、何かの大きな摂理を進めるときに、何らかの不幸が生じると、祭物になられたということを聞きます。では、どうでしょう。その祭物は必然的なものなのでしょうか。いいえ、私たちの精誠と信仰がしっかりとしていれば、そのような犠牲は必要ないということではないのでしょうか。私たちの信仰の不足さゆえに、祭物が必要になるというのは、ここでも説明されており、摂理に対する無知が多くの中核人物を十字架にかけてしまっていたという歴史を教会史は刻んでいます。

真のお父様は聖和されました。これは神様の予定なのでしょうか。真のお父様は私たちの罪を背負われるために地上に誕生されたのでしょうか。そのようなことはないのです。すべては私たちの不足さと摂理に対する無知ゆえなのです。

このようにユダヤ人の不信がイエス様を十字架にかけてしまうように、摂理においては一般民衆の不信が摂理的中核人物を十字架にかけてしまうということが起こるのです。ですので、末端の食口の信仰も重要なのです。私たちの不足さというものは、自業自得だけではすまないのです。摂理に同参する以上、中核者にも十字架を背負わせてしまうことになりかねないことを私たちは心しておくべきなのです。

中核者が十字架にかかるのは神様の予定ではありません。従うものの無知ゆえなのです。そして、伝道する対象者達の摂理に対する無知ゆえなのです。ですので、知らせるべきなのです。そう、あなたも知っておくべきことなのです。

【御言】

エリヤの再臨と洗礼ヨハネ

・神様はマラキ預言者を通じて、メシヤの降臨に先立ち、エリヤを遣わされると約束されたので、ユダヤ人たちはエリヤの再臨を渴望してきました。

・洗礼ヨハネが、正に再臨したエリヤであるということは、イエス様の証言にありました(マタイ 17:13、マタイ 11:14)。

【感想】

なぜエリヤのお話があるのでしょうか。実はこのエリヤのお話は私たちととても密接な関係がある

のです。真のお父様が誕生され、新しい真理を発表されるにおいても、やはり洗礼ヨハネ的な存在の方がおられたというのです。真のお父様の道を先駆けて正して、主の道のりを整える使命を担った人物がおられました。そして、その人物も洗礼ヨハネと同じ過ちを犯し、摂理の時代と共に消えていったというのです。では、そのような方と私たちの関係とはどういうものなのでしょうか。

私たちは先駆けて、真の御父母様に出会い、真の御父母様から御言を受け、真理を賜りながら、祝福も受け、神様の愛情を受けるようになりました。そのような私たちは、後から来る、私たちの因縁圏、そして氏族圏に対して、やはり洗礼ヨハネと同じ立場にあるというのです。因縁圏の人々が導かれる為に私たちが先駆けて祝福を受けたというのです。その犯しやすい過ちとは、真の御父母様を伝えるにおいて、自ら得ている地位や名誉、財産などに固執することなのです。真の御父母様は立派な方であるそう証すことが、自らの地位を失ったり、財産を失うことを意味すると誤解することによって、自分の与えられている使命を悟ることができなくなるというのです。皆様はそんなことはありませんか。生活圏において、仲間はずれにされたくない、生活圏において苦労はしたくない、いじめられたくない、そのような保身的な理由で、自らを御父母様を愛する家庭連合の会員であることを証せずにいるということが往々にしてあるというのです。

ですが、これは大きな誤解なのです。宗教において神様を愛することを告白することはとても重要な意義を持ちます。イエス様を心より愛しています。そう告白することは、クリスチャンにとってとても大きな意義があると思いますし、信仰の重要なポイントにもなります。

そのような意味において、私たちはどうかというのです。きちんと御父母様を知らない人の前でも、御父母様を愛していますと証せるのかというのです。これが洗礼ヨハネの問題であり、エリヤの再臨の問題でもあるのです。皆様はいかがでしょうか。何か恐れているようなことはありませんか。ですが、恐れれば恐れるほど、その恐れていることが現実になるのです。まだ起こりもしていない現象に怯えるのはよしましょう。御父母様の存在を知らせることは、とても重要なことなのです。それは神様の愛を届けることなのです。決して不幸を届けることではありません。愛の版図が広がることを思い描くべきなのです。迫害されることを思い描いても、苦しいだけではありませんか。その世界が、霊界のしのぎ合いでもあるのです。善霊の皆様の御活躍に期待したいと思っています。

【御言】

洗礼ヨハネの不信

- ・当時の祭司長や、全ユダヤ人たちが、洗礼ヨハネを崇敬するその心は、彼をメシヤであると信じさせるまでに至りました(ルカ 3:15)。
- ・しかし、最後まで自分はエリヤではないと主張した洗礼ヨハネの、神様の摂理に対する無知は、ユダヤ人たちがイエス様の前に出る道をふさいでしまう主要な原因となったのです。
- ・イエス様が十字架の死を遂げるようになった大きな要因が、洗礼ヨハネにあったことが分かります。

【感想】

ここでは洗礼ヨハネの摂理に対する無知が紹介されています。洗礼ヨハネはメシヤではないかと思われるほど、ユダヤの人々から尊敬と崇拝の念を抱かれていました。多くの人々から尊敬と崇拝を集めている人は、このような試練に会うというのです。自分の与えられた位置に対する執着心や、獲得した権力や利権を手放したくない、または失いたくないという不安と恐怖心から、自分を保身する為にメシヤを受け入れることができなくなってしまうということなのです。これは、イエス様が受けられた第3試練とも関連していると思います。与えられた富や権力、地位に固執するのは、まさにサタンがイエス様にこの地のすべてのものをおまえにあげようというのと同じなのです。その代わりに、サタンを崇拝せよと、つまり、メシヤを受け入れるなど迫られるというのです。多くの墮落人間はそのような富や権力には非常に弱く、あの洗礼ヨハネですら例外ではなかったということだと思います。

私たちはどうでしょうか。御父母様をメシヤとして受け入れて歩んでいます、誰かから「あなた

は家庭連合の信者ですか？」と聞かれたら、すぐに「はい、そうです。御父母様を愛しています。」と答えられるでしょうか。ここにも、えてして、自分の身を守るため、周りの人から迫害を受けたくないと思うが為に「いいえ、御父母様は知りません」と答えてしまうことも往々にしてあるということです。このようなことをしているとしたら、私たちは洗礼ヨハネと同じ過ちを犯していることになると思います。その結果はどうでしょうか。

私を通して伝道されるはずの人が、私が否定してしまったがために、御父母様の前に出る道をふさいでしまったことになるのです。そして、そのことが御父母様を十字架にかけてしまう要因にもなっているということです。このことは偉大なイエス様の弟子であったペテロにおいても同じ過ちを犯しています。

では、皆様はいかがでしょうか。誰かに「あなたはどのような宗教を信じていますか？」と聞かれた時、「はい、私は御父母様を愛する家庭連合の信仰を持っています」と答える準備はできていますか。真のお母様が言われているように、私たちは堂々と立ち上がる時ではないでしょうか。私たちを通して伝道される人の道を私たちがふさいでしまっはならないと思います。日本は信教の自由を憲法で保証しています。信仰を理由に迫害すること自体が違憲行為であることを私たちはしっかりと認識しています。

【御言】

第5章 復活論

- ・復活とは、再び生きるという意味です。再び生きるというのは、死んだからです。
- ・死んだということは、墮落による死をいいます。

【感想】

復活という意味において、聖書だけでは様々な解釈が今も存在しています。肉体が死んでしまった状態から息を吹き返し、墓から起き上がると信じている人もいます。ですが、私たちの解釈は異なります。私たちの死の概念は肉体的な死亡、心臓が止まり、脳が停止することだけを言うのではありません。人間が生きている状態というのは、神様の愛の主管下で本然の生活を営んでいることを意味します。人間始祖はそのような状態から墮落によって離脱してしまったのです。そのような墮落による創造本然の世界からの離脱を私たちは本来の姿を失った死と表現するのです。

ですので、この世にあふれている墮落人間とは私たちから見れば、みんなすべて死んだような人たちなのです。神様を知ることなく、神様の愛を感じることもなく、地獄のような生活で呻吟している人々を私たちは死んだ人と呼びます。ですので、復活とは肉体的に生き返ることではなく、そのような神様の愛の圏内から離脱した人間が神様の愛の主管圏に戻ってくることを意味します。ですので、外見的な変化はほとんどないということです。ただ、見る人が見れば、復帰された人は本然の神様の愛で輝いていると感じることでしょう。

ですので、死とは、復活とは、どのような生活をしているのかということではなく、神様の愛の主管下にいるのかどうかということなのです。ですので天一国の憲法でも国民であるということは御父母様に侍っているのかどうかということなのです。御父母様の愛の主管下、神様の愛の主管下にいるのかどうかということが重要なのだと思います。

どうでしょう。皆様は復活していますか。毎日神様の愛を感じていますか。そして、神様の主管される中で生きていますか。ですので、復活とは儀式的になされることではないのです。今の現状において、神様の愛の下にいるのかいないのかなのです。御父母様の愛の下にいるのかいないのかなのです。ですので、強制的に棄教を迫ることは、私たちはこのような死の意味に照らし合わせてみると殺人罪よりもひどいということです。

【御言】

墮落による死

- ・神様は本来、人間が墮落しなくても、老衰すれば肉身は土に帰るように創造されました。その霊人体だけが無形世界に行って、永遠に生きるようになっているのです。
- ・ゆえに、墮落による死とは、肉身の死ではなく、善悪の実を取って食べることによって、サタン主管圏に落ちたことを意味します。

【感想】

人間は墮落論で説明した内容で墮落することによって、肉体的に死ぬのではありません。ですが、私たちはそれを死と呼ぶのです。このように本然の神様の主管圏から離脱して、神様と関係のないサタンの主管圏に落ちてしまうことを意味します。ですので、私たちは無神論者や唯物論者、または神様を拒絶するような人々を死んだ人と見ます。ですが、そのような人間においても、神様の主管圏に戻ってくることが可能なので、復活ということが述べられるのです。人間の肉体においては復活ということはありません。一度、肉体的に死んでしまうと、生き返ることはほとんど奇跡的なことでしかありません。ですが、ここで紹介された死においては、復活することが可能なのです。

神様を知らない死んだも同然の人々が伝道されて、神様の愛に触れ、神様の主管する主管圏内に戻ることができたとしたら、それは復活したことを意味します。このように現実の世界には神様の主管圏とサタンの主管圏が混在しているのです。日々の生活においてもそうなのです。教会から足が遠のき、神様の主管圏から離れてゆくと、徐々にそれは死に近づいているのであり、本然の喜びを感じるができなくなってくると思います。逆に、熱心に神様の願いを実現するために歩む兄弟姉妹は、神様の関心と愛情を受けて、神様の主管する中にいるということではないでしょうか。

いかがでしょう。皆様は肉体的ではなくて、原理的に生きているといえますか。神様と関係のない生活をしているとしたら、それは神様の主管圏内にいるとはいえないのではないのでしょうか。天一国の国民とは御父母様を愛し侍る民です。御父母様を愛していないとしたら、天一国の国民とはいえないのが憲法の定めることであり、それは原理的な生死の問題にも関連していると私は思います。

【御言】

復活の意義

- ・復活は人間が墮落によってもたらされた死、すなわちサタンの主管圏内から、神様の直接主管圏内に復帰されていく、その過程的な現象を意味します。

【感想】

よく復活というと死んでしまった肉体が再び息を吹き返すようなイメージを持たれるかもしれませんが、ここで扱う復活とはそのような肉体の復活を言うものではありません。先日の内容にあるように、死の概念が異なるのです。墮落による死とはサタンの主管圏に落ちてしまうことを意味します。ですので、人間がサタンの主管圏から抜け出し、神様の主管圏に戻ることができれば、それを私たちは復活したというのです。

ただ、サタンが黙って私たちを手放すのかといえば、そうではないというのです。様々な讒訴条件を神様の前に提示して私たちをサタンの主管圏に引っ張ろうとするのです。それであるがゆえに、イエス様は自らの十字架を背負って来なさいと言われたのではないのでしょうか。

ですが、私たちは後で紹介しますが、サタンの主管圏から神様の主管圏に戻る方法を理論的に整理し、万人が復活できる方法を提示しているのです。ですので、私たちの復活の救いとは、篤信なクリスチャンのみに許諾されるものではなく、蕩滅という内容を理解した上で、罪の整理をすることで、誰もが神様の主管圏に戻れるということを唱えているのです。

現に、私はキリスト教の信仰を持っていませんでしたが、そのような道ばたの人間であっても、神様は救いの手を差し伸べられ、今に至っています。ですので、今の地上にもサタンの主管圏と神様の主管圏という二つの領域があるということです。そのようなサタンの領域から神様の主管圏に私たちが帰ってくることを原理では復活したと思います。どうでしょう。皆様は今どちらにおられますか。サタンの主管圏ですか、それとも神様の主管圏ですか。

【御言】

第6章 予定論

- ・予定説に対する神学的論争は、信徒たちの信仰生活に混乱を引き起こしてきました。
- ・聖書には、すべてが神様の予定(肯定)によってなされると解釈できる聖句があります。
- ・しかし、このような予定説を否定する聖書的な根拠も多くあります。
- ・それならば、このような問題が、原理によっていかに解決できるのでしょうか。

【感想】

皆様は自分の未来についてどのように考えておられますか。未来は自分の手で自由に切り開くことができると考えておられますか。それとも人生のレールは既に決まっており、時間の流れはそのレールの上を進ませるようなものだと思っておられますか。このように人間の未来における予定について、神学的な論争があるということです。なぜなのでしょう。

キリスト教は聖書を根拠としてその教理を展開します。ですが、その聖書において、すべてが神様の予定によって成されているということを表現する聖句と、そのような予定説を否定するような聖句が両方存在するというのです。

もし、この両方の聖句がまさに正反対の主張を生み出すとするならば、聖書自体が矛盾したことを根拠としているとしか言いようがないのです。ですが、統一原理はそのようなことはありませんということを主張します。その説明をしているのがこの予定論だと思います。

日本ではよく占いというものを通して、自分の運命を知ろうとする文化があります。これは、自分に対する神様の予定を様々な方法を使って知ろうとしていることであり、その運命に従えば幸せになれるという価値観があることを物語っています。予定論でも人間が神様の立てられた予定を成就すれば幸福になれることを説明します。ですが、そのような予定が必然的に成就されるのかというとそうではないということです。

皆様はいかがでしょうか。神様の敷かれたレールというのが見えていますか。神様は万人が幸福になれるように既にレールを敷かれているということです。ですが、人間の無知はそのレールを見失うような状況を生み出しており、そこで、幸福になることなく不幸な悲劇に身をうずめるということが起こっているのです。この予定論はすべての万人が幸福になれることを保証する理論にもなると思います。あなたも幸福になれるのです。そのための道筋は見えていますか。神様は既に道を用意されているということです。

【御言】

み旨に対する予定

- ・人間の堕落によって、完成することができなかった創造目的をなそうとする神様のみ旨は、すなわち復帰摂理の目的の完成をいいます。
- ・神様は唯一であり、永遠・不変であり、絶対者であられるので、そのみ旨も唯一であり、永遠・不変であり、絶対的でなければなりません。
- ・このみ旨に対する予定は絶対的です。

【感想】

ここで紹介されていることは、神様が成し遂げようとされていることは絶対的だということです。つ

まり、み旨の成就是必然的であり、どのような紆余曲折があろうともゴールに到達するというのです。ですので、摂理には失敗という言葉がないのです。延長されるということはありますが、なぜ延長と呼ぶかというと、必ず成就されるからなのです。その根拠がこの予定論にあると思います。

これは全体の摂理に限ったことではありません。私たちの個人、私たちの家庭、私たちの氏族に対する予定も絶対的であり、必然的なのです。ですので、私たちに託された創造理想というものは必然的に成就されるということになっているのです。

ですので、私たちは摂理の起源というものを明確に理解しないといけないと思っています。人間が起源となる活動は、ここでいう神様の予定ではありませんので、絶対的ではありません。そこには失敗も変更もあるでしょう。ですが、御父母様の提唱される摂理をこのような人間的な活動と混同してはなりません。御父母様の述べられる摂理とは神様の予定であり、その成就是必然的なのです。そのようなことを考える時、韓半島の南北統一は御父母様の人間的な願望ではないことが明確なので、摂理であり、必然的に成就されると私たちは見ているのです。

ですが、その摂理が、いつ、誰によって成就されるのかというのは、次に述べる人間に対する予定の問題になりますので、摂理には何時成就されるということが限定されていないのです。どうでしょう。私たちが復帰され、祝福を受けるのは、神様の予定からすれば、必然的なことだったので。ですが、私たちがいつ祝福を受けるのかは限定できないというのです。それが地上にいる間なのか、霊界に行った後なのか。ですので、私たちは選ばれた人間だけが祝福を受けるとは思いません。万人が受けるべきであるという結論もここから出てくるのです。皆様はいかがですか。

【御言】

み旨成就に対する予定と人間に対する予定

- ・復帰摂理のみ旨は、絶対的なものなので、人間は関与できませんが、そのみ旨の成就是、人間の責任分担が加担されなければなりません。
- ・み旨の成就是、相対的であるので、神様がなされる95パーセントの責任分担に、中心人物(人間)が担当すべき5パーセントの責任分担が加担されて、初めて、完成されるように予定されます。
- ・したがって、み旨成就に対する予定は相対的なものであり、
- ・人間に対する予定も相対的なのです。

【感想】

ここで紹介されているように、み旨の成就是、いつ、誰がということが決まっていけないのです。摂理とは神様の95%の準備に対して、私たち人間が5%を果たさなければ成就されません。それであるがゆえに、私たちには責任を果たすか果たさないかという選択があり、その選択により結果が左右されるのです。では、皆さん、摂理は短縮されるべきでしょうか、それとも延長されるべきでしょうか。必ず成就されるので、決して失敗とは言いません。時間が延長されたという認識なのです。その中で、真の御父母様は私たちの時代にみ旨を完成しましょうと提唱されているのです。何故でしょうか。

皆さんは苦痛が長引くことを願いますか、それとも少しでも早く苦痛から解放されることを願いますか。間違いなく後者でしょう。では、神様はどうでしょうか。子供として親が苦しむ姿が長引くことを願いますか。否だというのです。ですので、選択しましょう。摂理を成就する選択を。

私たちの5%の精誠で摂理は20倍もの進展をするというのです。これが非原理との違いです。摂理と関係がなければ、10を投入しても、5しか成果が得られないことも多々あります。ですが、摂理は違うのです。10投入すれば200の成果が得られるのです。それを保証するのがこの予定論なのです。

いかがでしょう。神様の摂理は私たちの投入に対して、それ以上、20倍の成果を約束されているのです。だとしたら、やってみたいと思いませんか。非原理で10投入して5を失うよりもはるかに益が大きいのです。摂理とはそういうものです。ですので、躊躇とはそのような原理の無知に起因す

るというのです。そして、知る人は、投入以上の恩恵をいつも受けているのです。これを幸福といわずして、感謝といわずして何なのでしょうか。皆様はいかがですか。

【御言】

予定説の根拠となる聖句の解明

- ・ロマ書8章 29 節～30 節に、『神様はあらかじめ知っておられる者たちを……あらかじめ定め……あらかじめ定めた者たちを更に召し、召した者たちを更に義とし、義とした者たちには、更に栄光を与えてくださる』と記録されている。
- ・神様はあらかじめ知っておられる人物を予定して、召命なさるのは神様の責任分担であり、その人物は自分の責任を完遂するとき、初めて義とされることができるのです。
- ・それゆえ、神様が下さる栄華も人間が責任分担を果たすことによってのみ、受けることができるように(み旨成就)が予定されるのです。

【感想】

摂理の特権はこういうことなのです。責任を果たして損はないというのです。損得勘定ではもちろん測ってはいけませんが、責任を果たせば、神様は私たちに福を用意されているというのです。そのことをここでは神様が下さる栄華と表現していると思います。ですので、精誠を尽くして、それが損失になることは決してないというのです。これが非原理の仕事と大きく異なる点なのです。非原理の会社で勤めれば、会社で投入された内容は、時には無駄になり、時には徒労に終わることもあるのですが、このみ旨の道における摂理においてはそれが決してありません。

もちろん、責任分担は大きいと感じられることもあるかもしれませんが、その責任分担に精誠を投入すれば、必ずそれに見合った報いがあるというのです。ですので、摂理には無駄がありません。それに失敗ありません。足りないということもありません。ただ、数的に不足することはありますが、小さな数字においても、その数字に込められた精誠は決して無駄にはなりません。

ですので、責任分担を与えられるということが、恩恵中の恩恵なのです。その責任分担に精誠を尽くせば、栄華を受けることが保証されているのです。こんな仕事は非原理にはありません。非原理の会社では受ける報酬というものは不確定です。投入に応じた報酬が得られるとは限りません。ですが、み旨においては、神様はしっかりと見ておられて、各自の精誠に応じた福を用意されて、それを届けに来られるというのです。それも、神様がじかに届けられるのです。これほどの恩恵が他にあるのでしょうか。私たちの精誠は神様に記憶されるのです。つまり、神様が永存されるかたであれば、その記憶も永存します。分かりますか。ですので、地上での精誠が永遠に通じるのです。ただ、これを非原理世界は知らないだけなのです。食口でも知らない人がいます。分かれば、責任分担が欲しいと行列ができるというのです。皆様の責任分担はいかがですか？

【御言】

第7章 キリスト論

- ・キリスト論では、神様を中心とするイエス様と聖霊との関係、イエス様と聖霊と堕落人間との関係、重生と三位一体など、キリスト論に関する諸問題を扱うことにします。

【感想】

私は復帰されるまでキリスト教の信仰は持っていませんでした。ですが、真の御父母様はキリスト教をととても深く研究されており、真のお父様はこの地上で誰よりもイエス様のことをご存知であると言っても過言ではありませんでした。そして、それぞれの宗教の担ってきた役割は異なるとしても、復帰路程における旧約、新約の聖書の持つ意味は大きく、私もこの道に来て、聖書をひも解き、多くのことを学びました。

ここでは、そのような聖書の内容や既存のキリスト教では難解とされてきた諸問題を真の御父母

様が解明されたことを紹介してゆきます。日本ではクリスチャンの人口はわずかだということも知っていますが、そのような状況においても、私たちはあえてキリスト教について学ぶべきであると思っています。

文鮮明先生は3ヶ国語の聖書を何度も読み返され、霊界からの啓示も受けられて、真理を探し出されたといひます。私たちは時代的な恩恵によって、探し出す苦勞をすることなく、信じるということで、その真理の示す恩恵に預けられる時を迎えています。このキリスト論では、メシヤはなぜ一人ではなく父母でなければならないのかということも論じられています。

皆様もキリスト教の素養や知識がないとしても、この章で語られる真理は心にとめておかれることをお勧めします。なぜなら、メシヤ家庭を理解する上でも、基本となることが説明されているからだと思ひます。メシヤとは何なのか。キリスト教で言う新生とは、私たちの重生とはどういうことなのか。信仰生活のうえでとても重要なことだと思ひます。

【御言】

創造目的を完成した人間の価値

・この問題を解決するためには、創造本然の人間の価値が、いかなるものであるかを先に知らなければなりません。

・創造目的を完成した人間は、

①第一に、神様のような価値をもつようになります。

②第二に、宇宙間において、唯一無二の存在です。

③第三に、天宙的な価値を持っています。

【感想】

イエス様は創造目的を完成した人間として私たちは見えています。つまり、既成のキリスト教のように、イエス様を神様そのものであるとは見ていません。このような教理は、既存のキリスト教からは異端視されることが、これまでの歴史だったのです。キリスト教の歴史をひも解くと、やはり、イエスキリストを神様と解釈するのか人間と解釈するのかで宗派の論争があったというのです。その結果、イエス様を神様とする宗派が勝利をして、今のキリスト教の教理が築かれ、普及しているというのです。ですが、文鮮明先生はそのような歴史も知っておられながら、あえてイエス様を神様そのものではないと宣言されたのです。

ですが、イエス様は私たちのような凡人とは違ひます。私たちは非原理世界にいたときは、墮落性に満ちた、サタンの血統を受けた人間だったのです。そのような人間と創造理想を完成した人間とは比べものにならないというのです。そのようなイエス様のように創造理想を完成されたのが真の御父母様なのです。

では、その創造理想を完成された人間とはどのような存在なのか、ということがここで紹介されています。イエス様の価値が天宙的というのもお分かりいただけたと思ひます。同じように御父母様の価値も天宙的なのです。

そして、私たちが信仰生活において、御父母様に似るようになるということは、似た分だけ、天宙的な価値に近づくということを意味すると思ひます。つまりは、人間としての価値を高めることができるというのです。ですので、私たちの合言葉は御父母様に似た信仰者に成ろうということなのです。なぜ、そのようなことを目指すのかというと、似ることによって、天宙的な価値に近づく、つまりは人間としての価値が高まるからなのです。皆様はいかがですか。

【御言】

創造目的を完成した人間とイエス様

・イエス様がもっておられる価値がいかに大きいといひても、完成した男性がもっている価値以上のものをもつことができません。

・このようにイエス様は、あくまでも創造目的を完成した人間として来られた方なのです(テモテ I 2/5)。

【感想】

この部分では私たちはイエス様を低めて評価しているということではないのです。ただ、イエス様を神様そのものであるとすると神様を見下げたような表現になっていると感じるだけなのです。ですが、私たちは明確に区別しているのです。イエス様は神様そのものではないと。これは御父母様においても同じです。私たちは御父母様を神様そのものとは思っていません。どこまでも御父母様は創造理想を完成され、神様と一体となられた父母として、人間として見ています。御父母様が神様だというのは誤解を招きます。この意味は、神様と一体となられた人間であるということなのです。

先日のお話にもあるように、人間は創造理想を完成すると神様のような価値を持つようになります。神様と一体となり、神様の宮となるのですから聖書でも理解できることだと思います。ですが、神様そのものではないのです。日本ではこの区別がとても難しいとされていることもあります。人間を神様として崇めてしまうことが往々にしてあるというのです。そして、御父母様を神様のように崇めることが信仰だと思っている人も多いというのです。

ですが、このキリスト論をしっかりと押さえると、それは誤解を招くということが分かります。御父母様は神様と一体となられ、神様の宮となられた、創造理想を完成した人間として存在しておられるのです。決して神格化して、神様そのものと見るわけではないのです。

ですが、私たちは神様と一体とされている御父母様を通して、神様の心情や意志、意図、摂理を知ることができるようになったのです。ですので、多くの宗教が教祖を神様のように崇めますが、あえて、私たちは違うとここで説明しているのです。

神様は遍在されます。そう、私たちと共に、あなたと共に、今、このブログを読んでおられるのです。神様は無形です。ですが、その無形の神様が有形の人間に対するには、有形なる人間を着なければならぬというのです。女性を美しいと言うときに、着ている服が美しいというのは的を得ていないというのと同じように、御父母様が偉大であるという以上に神様はもっと偉大であり、まったく愛のお方なのです。私たちは、御父母様と出会うと同時に、御父母様と一体とされている神様と出会ったのです。そして、神様のメッセージを聞いたのです。皆様はそう思えますか。

【御言】

イエス様は神様御自身であられるのでしょうか

- ・ピリポがイエス様に、神様を見せてくださいと言ったとき、『わたしを見た者は、父を見たのである。どうして、わたしたちに父を示してほしいと、言うのか。わたしが父におり、父がわたしにおられることをあなたは信じないのか』と答えられました。
- ・このような聖句によって、多くの信仰者たちは、イエス様を創造主、神様であると信じてきました。
- ・イエス様は完成した人間として、神様と一体をなしているのです。彼の神性から見て神様とはいえませんが、神様御自身になることはできません。
- ・体は第二の心といえますが、心それ自体ではないのと同じく、イエス様も第二の神様とはいえませんが、神様御自身になることはできません。

【感想】

ここで紹介されている聖句でも明らかなように、イエス様は父と自分を明確に区別されています。その上で、父と一体となっていることを語っておられるのです。キリスト教の歴史を見れば、イエス様を神様そのものと見る宗派とそうではない宗派がかつて公の大きな会議で論争し、その論争に勝ったのがイエス様を神様そのものであると見る宗派であったために、対立した宗派は異端とされ、排斥された歴史の上に今のキリスト教は成り立っています。ですので、真の御父母様がここでの内

容を主張すれば、当然、既成のキリスト教からはかつての宗派論争の結論を踏襲し、私たちを異端と断定するでしょう。これまでのキリスト教の迫害の根拠にもなったことだと思います。

ですが、私たちにしてみれば、イエス様を神様そのものと見ることに明らかに問題があるということとを認識しているのです。この問題が解けると、三位一体論は難解でもなんでもなくなるのです。

ですので、蕩滅復帰をするようになると、御父母様は神様そのものではないと主張すると、いやそれは不信仰者の発言だと内部からも言われかねない雰囲気もあった時代があります。ですが、時代は大きな恩恵時代に入り、蕩滅が整理されてくると、このような真理も明確になってくるのです。日本の陥りやすい人間信仰をもっと昇華させる必要が私たちにはあると思っています。御父母様は神様と一体となられた人間ではありますが、神様そのものではありません。

では、皆様伺います。人間としての御父母様と神様そのものの区別はついていきますか。神様は無形です。御父母様は有形です。そのような違いを理解した上で、私たちはさらに飛躍して、信仰を育てるべきなのではと私には思っています。

【御言】

重生論と三位一体論

重生の使命から見たイエス様と聖霊

- ・イエス様は、新たに生まれなければ、神様の国を見ることはできないと言われました(ヨハネ 3/3)。人間はなぜ新たに生まれなければならないのでしょうか。
- ・アダムとエバが墮落して人類の悪の父母となったので、悪の子女を生み殖やしました。
- ・したがって、墮落した人間は原罪がない善の子女として新たに生まれ直さなければならないのです。
- ・イエス様は、墮落した子女を、原罪のない善の子女として再び生み直してくださるために、真の父として来られた方であり、聖霊は真の母として来られた方なのです。

【感想】

ここでは、私たちがいかに重生するのかということが簡単に説明されています。そして、それ以前にもっと大切なのは私たちは重生しなければ幸福になれないという問題なのです。墮落論で原罪のことについて説明しましたが、私たちがその原罪を整理しなければ、サタンはその原罪を理由に私たちに対して所有権を主張し、そして、サタンの下で神様と関係のない生活をしなければならないようになっていくということです。

では、その重生とはどのようなことになるのでしょうか。イエス様の時代、キリスト教の新生においては、イエス様を愛するだけでは不十分だということです。イエス様の相対として顕現された聖霊とそれから、神様を中心とした四位基台を造成しないと新生はなされないということです。それは、子供を出産するのに、父母が必要であり、さらに神様を中心としなければサタンが所有権を主張することでも、明白なのです。

私たちにおいては、真の御父母様と神様が一体となられ、私たちは真のお母様の胎中に戻って再び生まれるという路程を通過するのです。ですので、教会においても、真のお父様だけを愛するというのは、信仰において生みかえられにくいという問題もあったと思います。今の時代もそうなのです。真のお母様だけを愛するとしても、重生は難しいと思います。真のお父様を愛し、真のお母様を愛し、神様を愛して、本然の四位基台がきちんと造成されて、初めて私たちは生みかえられるということが、ここでは簡単に説明されています。

さて、では、皆様は今どうでしょうか。真のお父様が聖和され真のお母様が中心に立たれていますが、真のお母様だけを愛するようなことはありませんか。本当の救いとは、霊界におられる真のお父様を愛し、そして、地上の真のお母様を愛し、さらに神様を四位基台の中心として愛するとき成されると私は思っています。それだけに、真のお父様をいかに愛するのかということで、霊的感性を啓発しないといけなことを私も感じております。今、摂理は真のお母様が中心となっておら

れるように見えるかもしれませんが、そうではなく、真のお父様と一体となられている御父母様が今も摂理の中心なのではないでしょうか。

【御言】

三位一体論

- ・神様の創造目的を達成するために、イエス様と聖霊は、神様を中心として合性一体化することにより、四位基台をつくらなければなりません。
- ・このとき、イエス様と聖霊は、神様を中心として一体となるのですが、これがすなわち三位一体です。

【感想】

既成のキリスト教会ではイエス様を神様そのものと見てしまうために、この三位の意味が分からなくなってしまうのではないかと思います。ですが、御父母様は明確に神様とイエス様と聖霊を区別されており、この三者が四位基台を築いて一体化することが三位一体であると明確に説明されているのです。キリスト教は霊的な三位一体なので、地上で見えることはできませんが、私たちは神様と真のお父様、真のお母様という三者を地上で侍ることができたというのです。では、四位基台における子女の立場に誰が立つのでしょうか。それが、キリスト教で言えば信徒になるのであり、私たちが言えば真の御子女様のみならず、私たち食口が入ってくるということだと思います。

ですので、このような創造理想の四位基台が明確になるとき、一人の教祖が宗教をリードするということはありません。必ずこの三位一体ということを経験する限り、家庭にならなければ宗教はリードできないようになっているのです。キリスト教の根本がそうだということを説明されているのだと思います。ですが、高等宗教であればあるほど、独身生活を強調し、神様との関係を何とか修復しようと懸命の努力を重ねると思うのですが、救世主が家庭を持たれる時をもって、摂理は個人的なものから家庭的なものに移行しており、私たちも家庭をもって天国に入ろうとしているのです。

それであるがゆえに、今の時代、真のお母様だけに侍っても救われるのは難しいのが摂理だと思います。霊界におられる真のお父様に侍り、さらに無形の神様に侍り、地上の真のお母様に侍ってこそ、創造本然の四位基台が形成され、私たちは重生されると見えています。皆様はいかがでしょう。このような三者に侍っておられますでしょうか。御父母様を人間的に愛して、侍るだけでは不十分なのが、原理的な信仰観だと私には思えます。

【御言】

霊的三位一体と実体的三位一体

- ・イエス様と聖霊は、神様を中心とする霊的な三位一体をつくることによって、霊的眞の父母の使命を果たしただけで終わりました。
- ・イエス様(再臨主)は神様を中心とする実体的な三位一体(眞の母)をつくり、霊肉共に眞の父母となることによって、墮落人間を霊肉共に重生させ、原罪を清算させて、実体的な三位一体をつくらせるために再臨されます。

【感想】

既成のキリスト教ではイエス様はすべての救いの使命を完結されて昇天されたと解釈する人がほとんどではないでしょうか。それならば、なぜイエス様は再臨されなければならないのでしょうか。そのようなことを論じるとき、その理由を簡単に見てみると、イエス様はこの地上で結婚することができなかったということなのです。イエス様は結婚すべきであったという解釈は今の既成のキリスト教には見られないかもしれませんが、真の御父母様はこのような原理を解き明かされる中で、明確にイエス様は結婚すべきであったと述べられているのです。

それも、イエス様の結婚は個人的、あるいは家庭的な幸福を味わう為にするものではありません。真の父母となり、全人類を原罪のない子女に生みかえるということをしなければならなかったのです。ですが、イエス様はその使命を完結することなく、十字架にかかれたというのです。

そのイエス様の使命を継承して、その使命を成就されたのが真の御父母様だということです。ですので、私たちの宗教は独身生活を最高の善とするのではなく、結婚して、家庭を築き、夫婦をもって原罪を整理して、天国に入る子女として生みかえられるという路程を通過するのです。ですので、祝福を受けるだけでは、不十分なのです。

四位基台が分かれば、お分かりになると思いますが、祝福を受けて、神様、真のお父様、真のお母様という三対象を愛して、侍ってこそ、この地上で重生されるというのです。そこに愛の実践という責任分担があるのです。人間のあらゆる罪は原罪が清算された後、蕩滅という路程を通じて、解消することが可能になってきています。その蕩滅路程を歩む原動力、動機となるのが、神様から流れてくる真の愛だと思います。

これまで 2000 年の歴史を引っ張ってきたのはイエス様と聖霊の霊的眞の御父母様の恩恵ゆえでした。ですが、今の時代は、地上に眞の御父母様が顕現され、救いの摂理を完結され、私たちに救援の手を差し伸べられているのです。皆様はいかがですか。眞のお母様しか見えていないようなことはありませんか。三対象はしっかりと見えて、愛しておられますでしょうか。